

伝小倉実名筆藤葉集切管見

日比野 浩 信

一
国文学研究における古筆切の有用性は、改めて述べるまでもあるまい。現存本に比べて書写年代が古いという

点のみにおいてさえ、より成立時期に近い頃の本文であったり、ある時代における享受の様相を示す本文であったりする場合などもある。例え現時点においてはさほど有用性を見出し難くとも、研究の進展・深化に伴って、改めてその価値を指摘し得ることもある。

古筆切と呼ばれるものの多くは、切断されずに一巻・一冊の典籍として伝存していれば（仮にその一部に欠損があったとしても）、必ずや「古写本」「善本」などとして伝本・本文研究の然るべき立場に位置付けられていたであろう。

古筆切は、その残存が断片的であるが故に、見過ごされてきた重要資料であり、今後は、古筆断簡をも加味した上で、伝本・本文について再検討が成されるべきであろう。

藤葉集は康永三年（一三四五）十二月から翌四年八月の間に、小倉実教によって編まれた私撰和歌集で、春・夏・秋・冬・恋上・恋下の六巻が残存するのみ。元来は十巻であり、雑部などが散逸したものと推測されている。伝本は十本ほどが確認されているが、やはり巻六までの欠巻本である。全て江戸期の書写に掛かり、新編国歌大観では底本として群書類従本が用いられているのが現状である。

なお、藤葉集の散逸歌については、後世の類題集などへの集付を伴った収載歌によって、百余首の存在が確認

されている。

その一方で、古筆切に目を向けてみると、編者小倉実教の孫に当たる小倉実名を筆者と極める藤葉集の断簡が伝わっている。古筆名葉集の類には何ら記載されていないが、現存伝本に比べて格段に古い書写年代に加え、巻七以降の散逸部分と思われる箇所が存在も報告されており、看過すべきではあるまい。

これまでに既に本文の集成及び検討も進められているが、その後も新たな報告・紹介があり、そのうちの一部分には稿者も携わったこともあり、また、既存箇所ながらも未紹介の断簡が管見に入ったことから、敢えて本文の再集成を試みておきたい。

二

伝小倉実名筆藤葉集切は、もとは一面七行書の四半形の冊子本。小倉実名には冷泉家時雨亭文庫蔵の永徳百首が真筆資料として伝わっており、また、これと同筆の、すなわち実名真筆の古今集切・新古今集伊賀切・新勅撰集切・玉葉集切なども残されている。実名の旺盛な書写

活動が窺われるのみならず、撰者小倉実教の孫に当たる人物が筆者と極められているだけに、真筆ならばその本文に対する信頼性も期待され注目される。が、残念ながらこれら実名真筆と比べて藤葉集切は別筆、実名の真筆ではなさそうである。それでも書写年代は実名の活躍期と同じく南北朝頃とみられ、現存伝本に比べて古いのみならず、藤葉集の成立からわずか数十年の内に書写された、成立時期に極めて近い頃の書写伝本として注目されよう。

これまでに紹介されているものも含め、管見に入ったのは以下の十三葉。

①個人蔵

文保三年百首哥たてまつりける時

芬陀梨華院前関白内大臣

たちかへりなを春さむし谷陰や

うちいてし浪の又こほるまで(一一〇)

春雪をよみ侍ける

前大納言尊氏

さく梅の花はさなからうつもれて(一一一)

②『続古筆の楽しみ』

今出河前右大臣

ふる年の雪もけぬめりいましこそ

わかなたつむらめ春日の、原（一五）

民部卿為定

かつきゆるおちかた野辺の雪間より

袖みえそめて若菜つむ也（一六）

後西園寺入道前太政大臣

③エール大学蔵手鑑（杉谷氏の紹介による）

元徳三年三月尽日内裏にて

三首哥つかうまつりけるに暮春

落花といふことを

藤原為明朝臣

春もはやくれなはなけの色みえて

うつろふ花をさそふ山風（八一）

文保百首哥に

④個人蔵

前大納言為兼家の哥合に夏朝を

従二位為子

夏あさき青葉の山のあさほらけ

花にかほりし春そわすれぬ（九二）

卯花を 前大納言為世

いと、なを老のそらめに卯花を

たそかれ時は月とこそみれ（九三）

⑤『続々国文学古筆切入門』

ふみわくる人しなければふる里は

つもるま、なる庭のしらゆき（三七〇）

嘉元百首哥に雪

民部卿為藤

よしさらは雪をもめてしいたつらに

つもれと人のをとつれもせぬ（三七二）

雪似花といへることをよめる

⑥『古筆学大成』（『名家古筆手鑑集』『私撰集残間集成』）

一夜にもうきいつはりはしらるゝを

なにのたのみにたへて待らむ（四七八）

待恋の心をよみ侍ける

民部卿為定

いつはりのかきりをいつとしらぬこそ

しみてまつ夜のたのみなりけれ(四七九)

同心を よみ人しらす

⑦『古筆への誘い』

われたはつけてけふみつるかな(五三八)

前大納言尊氏家にて同心をよ

み侍ける 藤原為実

思やれあしたのとおもかけは

夢にみてたにをきうかりしを(五三九)

元徳三年九月十三夜内裏三首

哥に別恋 後光明照院関白前左大臣

⑧『古筆学大成』

わたりそめぬとなにたのみけむ(五五三)

逢不遇恋の心を

藤原親貞

ふみそめてのちにもまよふ恋ちをは

またたちかえり誰に問まし(五五四)

恋哥に 岩藏姫君

いかにせんまつとせしまにねられねは(五五五)

⑨白鶴美術館蔵手鑑(『古筆手鑑大成』による)

和氣嗣成朝臣

逢ことのまれになり行よなくは

あたに思しゆめそまたる、(五六〇)

嘉元百首哥に不逢恋

後西園寺入道前太政大臣

おとろかすゆふつけ鳥よゆめにたに

行あふさかの関なへたてそ(五六一)

⑩『古筆への誘い』

藤原季継朝臣

みるからになをかきくらす涙かな

月にもつらきかけやそふらむ(六三〇)

侍従為親

涙さへ袖のひまなくなりけり

人のうきをや月はみすらむ(六三一)

⑪書陵部蔵手鑑

かすみの関のかひやなからむ

文保百首哥に

民部卿為藤

よしさらはぬきたにかへん花ころも

いまはあたる春のかたみに

更衣の心を 前大納言経任女

夏衣ひとへにおしき花そめの

⑫『平成新修古筆資料集 第四集』

花さかりなりける比申つかはしける

二品法親王寛尊

身をしれはとはてそする君かすむ

やとの梢の花のさかりを

返し 前大納言尊氏

此屋戸をきみかとはねはさく花の

とかなしてそわれはうらむる

⑬『古筆の楽しみ』

さくはなのわれとうつろふ色なくは

風のつらさになしやはてまし

中臣祝成

我とちるならひは花にかこつとも

風のやとりを猶やうらみむ

正三位教氏

さそひしはつらさなからも今はた、

右の①から⑬のうち、早くに高田信敬氏が⑥を成立からさほど隔たらぬ頃の書写に掛かる断簡の存在として取り上げられ、田中登氏は⑤を紹介^③、改めて⑤⑥⑨を検討された。この時点では散佚箇所^④の断簡は未報告であったが「巻七以降の散佚部の内容を窺い知ること」の可能性を指摘された。古筆学大成には⑥⑧の二葉が収載されたが、杉谷寿郎氏は③⑤⑥⑧⑨⑪の六葉を一覧され、⑪が藤葉集の散逸部分であり、その内の一首「よしさらは」の歌が「藤」の集付を伴って題林愚抄・明題和歌全集に収録されていることを指摘された。田中氏が予測された、散逸箇所^④の出現が現実となったわけである。

その後も、久曾神昇氏の所蔵に帰していた⑥が『私撰集残間集成』^⑥に収められ、兼築信行氏所蔵切⑩^⑦の紹介を

経て、『古筆への誘い』⁽⁸⁾に⑦⑩が掲出された

また、田中氏が次いで公表された⑫は、その後『平成新修古筆資料集 第四集』⁽⁹⁾にも収められたが、藤葉集切二葉目の散逸箇所断簡であり、この時点で、久保木秀夫氏は、⑪⑫の二葉を「散佚歌集切集成 増訂第一版」に収録された。

さらに田中氏所蔵の⑬が『古筆の楽しみ』⁽¹¹⁾に、②が『続古筆の楽しみ』⁽¹²⁾に相次いで取り上げられた。この⑬②の紹介に際しては、稿者が解説を担当したが、⑬は、三葉目の散佚箇所出現であった。

すなわち、これまでに現存箇所八葉、散佚箇所三葉が知られていたことになる。

三

今回新たに管見に入ったのは①④の二葉。共に個人蔵の断簡である。

①は縦二二・五センチ×横一四・八センチ。一面分の七行が存している。巻第一春歌の一〇番歌と一一番歌。上方の楕円形の染みと穴、下方寄りの染みは②の断簡にも

共通しており、恐らく冊子本の状態で生じた傷みであろう。①は他の断簡に比べて殊に痛みが激しく、表紙が外れた冊子本の前の方の丁であり、あるいはこれより前の丁は早くに失われ、むき出しの最初の丁だったのではなかったかと思われるほどである。

④も個人蔵。縦二二・〇センチ×横一四・六センチ、やはり一面分の七行。巻第二夏歌で、九二番歌と九三番歌。①④共に、料紙左下の手擦れ跡からも、丁の表側の面であることが判るが、①のノドの部分、料紙右端の上から三センチと六・四センチ当たり、また、少々判りにくい下方にも同様の綴葉装の綴じ目らしき痕跡が見られ、その四〜五ミリ内側や下方にも、ほぼ同じ幅で穴の痕が見られる。④は裁断があるようで、綴葉装の綴じ目すなわち切り込み痕は見られないが、三〜四ミリ内側に綴じ穴の痕がある（料紙内側の綴じ穴痕は他にも①のように図版で確認できるものもある）。恐らくこれも綴じ目痕であろう。つまりは元々は綴葉装であったがさらに穴を穿って大和綴（あるいは、結び綴）にしたのであろう。①には比較的明瞭に切れ目と綴じ穴両方の痕跡が残っているのである。当該伝小倉実名筆藤葉集は、いわゆる綴



綴じ目跡
(右・断簡①、左・断簡④)

葉装大和綴（綴葉装結び綴）というべき装丁にされたようである。

四

さて、散佚作品や残欠作品では、その散佚部の残簡には絶対の資料的価値がある。この藤葉集についても同様である。しかし、現存箇所本文をも看過すべきではない。

伝実名筆切を新編国歌大観の底本とされる群書類従本と比較してみると、次のような異同がある。なお、以下

伝小倉実名筆藤葉集切管見

の本文の検討には宮内庁書陵部蔵本をも用いた。

（次頁一覽参照）

多いとみるか少ないとみるかはともかく、詞書や作者名のみ歌をも含めて都合二十四首のうち、十箇所異同がある。従来指摘のある通り、現存伝本については全て同系統ということが出来るようであるが、ここでもほとんどが一字二字の文字単位での異同であり、基本的に本文そのものはさほど隔たりのあるものではなさそうである。

a・bは官職を以て示される作者名に付随する小書で、群書類従本には有り、断簡には無い。二箇所のみのことであり確定的ではないが、断簡において、偶々この二箇所記述が抜け落ちていたわけでもあるまい。本来、同時代的には官職によってその人物がいずれを指すかは判るのであり、後世にこそ必要な注記として後補されたのであるうか。成立に近い時代における本文の特質として、断簡には人物名注記は無かったと考えられるのかもしれない。

e・gはそれぞれ詞書における助詞一字の有無であり、さほど問題とはなるまい。

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
	一〇	一五	八一	三七一	四七九	五四〇	五五三	五五四	五五五	五五五
	作者	作者	四句	三句	二句	詞	五句	詞	作者	初句
伝実名筆切	芬陀梨華院前関白内大臣	今出河前右大臣	うつろふ花を	つもれと人の	かきりをいつと	別恋	なにたのみけむ	逢不遇恋の心を	藤原親貞	いかにせん
群書類従	芬陀梨華院前関白内大臣内経	今出河前右大臣公顕	うつらふ花を	つもれは人の	かきりはいつと	別恋を	何頼らん	逢不遇恋心を	藤原親定	いかゝせん
	新拾遺集四八・題林 愚抄四一九	文保百首七〇五	題林愚抄一一八七	新統古今集七二一・ 嘉元百首一九五八	題林愚抄六六六・ 為定集九二	新拾遺集一一八〇・	題林愚抄六八一八 新千載集一四七九			

i は作者名の漢字表記の違いであり、「定」「貞」ともに音は「テイ」、訓は「さだ」となる。建仁年間に活躍の認められる藤原親定とは当然、別人である。「藤原ちかさだ」は藤葉集に二首入集し、この五五四番歌のほか、群書類従本に拠れば

題しらず

藤原親貞

後の世のたかむくいとかなりやせんこれをはしめの人のつらさは(四五二)

とあり、他に和歌事績も認められず、この二首は同一作者であろう。群書類従本でも「親貞」のようにある点、

注意すべきであろう。書陵部本などでも「親貞」とあり、新編国歌大観でも五五四番歌の作者を「親定」から「親貞」へと校訂して統一しているように、断簡の本文「親貞」を認めるべきであろう。

特に問題となるのは和歌本文の異同である。

c、八一番歌の第四句は、断簡では「うつろふ花を」とあるが、群書類従本では「うつらふ花を」とする。「うつろふ」「うつらふ」とも意味は同じで、音の表記の問題であろうが、「ろ」「ら」の字形の類似も異同発生の要因であろう。この歌は題林愚抄(一一八七)にもあり、「うつろふ花を」とする。藤葉集でも新編国歌大観によれば「うつらふ」とする歌が他にも一首(三六)あるが、この歌の該当箇所は、書陵部本では「うつろふ」とある。一方の「うつろふ」も四首(六六・七七・三〇二・三〇五)ある。一般的には「うつろふ」とする表記が多そうである。dは、既に田中氏が検討¹³⁾しておられるが、三七一番歌は群書類従本には

よしさらは雪をもめてしいたつらにつもれば人のを
とつれもせぬ

とあるが、その第三句「つもれば人の」が、断簡では「つ

もれと人の」とある。この歌は、嘉元百首(一九五八)に「雪」題で詠まれた歌で、新統古今集(七二二)にも入集しており、両者とも断簡同様「つもれど」とある。一見、雪が積もれば人の訪れが無くなってしまいうたため、その元凶たる雪を賞玩すまいというようにも読めなくもないために「つもれば」の本文がまかりとおったのであろう。この歌は、古今集の業平詠、

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のお
いとなるもの(八七九)

を本歌とするようである。月景色は美しいが、「月」が年月として積もれば老いとなる。賞玩すべきものに敢えてマイナスのイメージを付加することで、逆説的にその心境を複雑化して趣向を凝らしたのであろう。当該三七一番歌も、趣深く降り積もった雪も、訪れる人がなければ空虚であり、いっそ賞玩することをやめてしまおうと言うのである。新編国歌大観では校訂されていないが、断簡の本文「つもれと人の」の方が穩当であろう。何より典拠と言うべき嘉元百首と一致する本文であることを拠り所としてよからう。

eもd同様、田中氏が検討された四七九番歌の第二句

で、群書類従本では

偽のかきりはいつとしらぬこそしみて待よの頼み也
けれ

のように「かきりは」とあるが、断簡では「かきりを」とする。ニュアンスに相違は生じるが、いずれがより穏当であろうとも判断し難い。ただ、この歌は為定集(九二)と題林愚抄(六六六六)にも見られ、ともに断簡と同じく「かきりを」とある。為定集の本文と一致する点は尊重すべきであろう。

g は五五三番歌で、群書類従本には、

立かへりよとむもしらて思ひ川わたりそめぬと何頼
らん

とあり、この第五句を断簡では「な^にた^のみ^けむ」とする。いずれが正しいとは決し難いが、この歌は新千載集(二四七九)にも入集しており、そこでは断簡同様「何^たの^みけ^ん」のようにある。現在推量と過去推量との違いであろうが、繰り返し辛い思いをすることになるであろうことも知らずに、恋し初めた頃の回想とすれば、断簡にあるように「な^にた^のみ^けむ」がよからう。

j、五五五番歌は群書類従本によれば

いか、せん待とせしまにねられねはゆめもたのみの
よなくもうし

とあり、他の歌集への入集は見られない。この初句が断簡では「いかにせん」とある。辞書的な意味としては「いかに」「いかが」にある程度の区別はあるように見られるが、和歌に当て嵌めるには必ずしも確定的ではなさそうである。

和歌における用例は少なからず、後世においてはほとんど区別が付けづらいという印象である。しかし、古い用例はさほど多いというわけではなく、例えば古今集では「いかにせむ」「いかがせむ」にそれぞれ一例ずつ、

名とり河せぜのむもれ木あらはれば如何にせむとか
あひ見そめけむ(六五〇)

思ふともかれなむ人をいかがせむあかずちりぬる花
とこそ見め(七九九)

があり、当該箇所本文には取り立てて異同は無い。この場合は、前者の「いかにせむ」は、対処的な手段として述べられているようであり、後者はどうにも出来ない困惑と諦めを反語的に述べたものと言えようか。後世の用法が必ずしもこれに適っているわけではなさそうで、

一概には判断できないが、敢えて言えば、当該藤葉集歌は相手を待つて寝られぬ夜の辛さに対する、いかんともし難いながら講ずる対処としてその手段を「いかにせむ」と述べたのであり、前者に近いように思われる。すると、なおも検討すべきではあるが、本文としては断簡にあるように「いかにせむ」がより穏当といえるのかも知れない。

こうしてみると伝実名筆切における本文は、そのほとんどは、群書類従本に比べてより合理的で穏当な本文であると言つてよさそうである。

これにより、伝実名筆切の現存箇所の本文は、近世期書写の現存本と基本的には同系統ではあるが、いくつかの異同が存すること、その異同は、他出文献との一致や、内容的な検討により、群書類従本よりも穏当で合理的な本文を有していそうであること、よつて、群書類従本を底本とした新編国歌大観所収本文には当該断簡の本文に基づく校訂の必要性が検討されるべきこと、拠るべき現存本の本文の選択には、当該断簡との合致の度合い・近似生などがその基準とし得るのではないかと言ふことなどが指摘できそうである。

総じて、現存箇所と言ふども伝実名筆藤葉集切の資料

的価値は低からぬものであることは確かであろう。

五

以上、伝小倉実名筆藤葉集切の本文を集成、若干の検討を加えた。

現時点で確認できたのは十三葉。そのうち三葉が散佚箇所に当たり、新出の二葉は現存する箇所であった。このような残欠作品においては、散佚箇所に目を向けられがちである。当然、散佚箇所の本文出現は資料として絶対的であり、重要である。しかし、当該藤葉集切は、南北朝期成立作品の南北朝期書写断簡であり、成立に極めて近い時代の本文を伝えているのみならず、現存本が全て近世以降の書写本あるという現状においては、書写年代が格段に古い伝本として看過すべきではない。

事実、今回略述したように、現存本と比べて少なからず異同があり、断簡の本文は、より穏当な、あるいはより合理的な本文であると見ることが出来そうである。

散佚部・現存部問わず博搜に努め、本文の校訂や伝本の選定に資する看過すべからざる資料として大いに活用

すべきであらう。

注

- (1) 梁瀬一雄氏『中世和歌研究』（昭和五十五年 加藤中道館）
- (2) 高田信敬氏『雲葉集』と『藤葉集』（『日本古典文学会々報』102 昭和五十九年十月）
- (3) 田中登氏「資料紹介 藤葉集の古写断簡」（青須我波良）39 平成二年六月） ↓藤井隆氏・田中登氏『続々国文学古筆切入門』（平成四年 和泉書院）
- (4) 田中登氏『古筆切の国文学的研究』（平成九年九月 風間書房）
- (5) 杉谷寿郎氏「伝小倉実名筆藤葉集切」（『語文』88 平成六年三月 ↓『平安私家集研究』（平成十年 新典社）
- (6) 久曾神昇氏『私撰集残簡集成』（平成十一年 汲古書院）
- (7) 兼築信行氏「資料紹介 新出の伝小倉実名筆藤葉集切」（『国文学研究』126 平成十年十月）
- (8) 国文学研究資料館『古筆への誘い』（平成十七年 三弥井書店）
- (9) 田中登氏「中世私撰集と古筆切」（『関西大学国文学』89 平成十七年二月）
- (10) 久保本秀夫氏「散佚歌集切集成 増訂第一版」（平成二十

年三月）

- (11) 田中登氏『古筆の楽しみ』（平成二十七年二月 武蔵野書院）

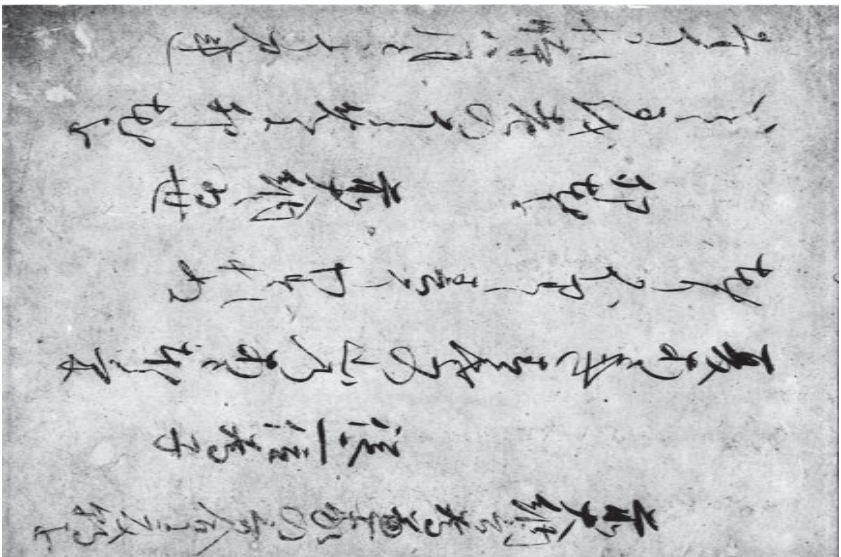
- (12) 田中登氏『続古筆の楽しみ』（平成二十九年五月 武蔵野書院）

- (13) 注（4）

- (14) 六五〇番歌の該当箇所は、大江切に「いかにせよとて」はそのままに「せよとて」に「よとてカ」（「カ」は行の左）のような傍書がある。また、七九九番歌は永治二年家永本で「いかに」とあって「に」を見せ消チ、「か」と傍書しており、結果的に「いかに」とある。

（ひびの ひろのぶ・本学非常勤講師）

④ 個人藏



① 個人藏

